

## 耳かけ型補聴器の装用

補聴器がきちんと装用されていないと落としてしまったり、ピーピー音（ハウリング）が起こったりします。使いはじめのうちにはうまく装用できませんがコツをつかんでストレスのない毎日を過ごしましょう。

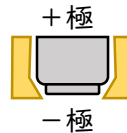
### ○電池を入れる

- ①補聴器の電池ボックスを開け、古い電池を取り出します。
- ②新しい電池の保護シール（+極に貼られている）を剥がします。
- ③電池の+極側が上になっていることを確認して補聴器にセットします。
- ④電池ボックスを閉じると電源が入り、イヤモールドを通じて音が聞こえます。

#### Point

電池が空気を取り込むために保護シールを剥がしてから1分程度おいて使用しましょう。

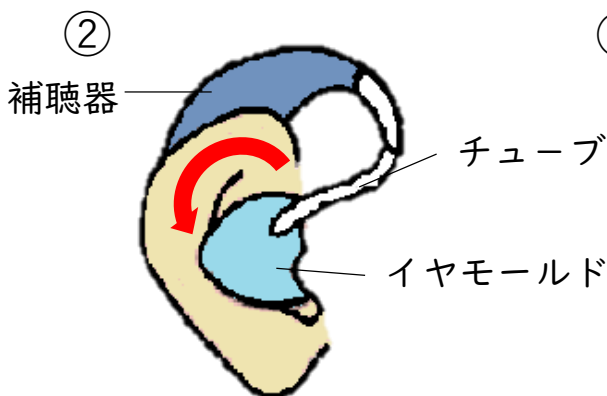
#### 電池の向きに注意



電池ボックスのふたの内側に電池の向きが印字されていることが多いので確認してみましょう。

### ○補聴器のつけ方・外し方

- ①左右の確認をしましょう。右に赤色、左には青色の印があります。
- ②イヤモールドを軽く持ち、矢印の方向へ回しながらゆっくりと耳の中へ押し込んでいきます。
- ③補聴器を耳の後ろに乗せます。
- ④外すときはつけるときと反対の方向に回しながら引き出し、イヤモールドの付け根をつまんで、静かに耳から外してください。
- ⑤電池ボックスを開けて電源を切ってください。



# 補聴器特性とSPLオーディオグラムの見方



先月号に引き続き、聴力測定の後には、先生から渡される測定結果の見方について確認したいと思います。今回は、補聴器の状態を把握する「補聴器特性表」と補聴器を装着して測定した結果が記載されている「SPLオーディオグラム」について説明します。

測定結果にどのような情報が記載されているのか、ぜひ、自分自身の測定結果と照らし合わせながら、確認してください。

## 補聴器のデジタル機能について

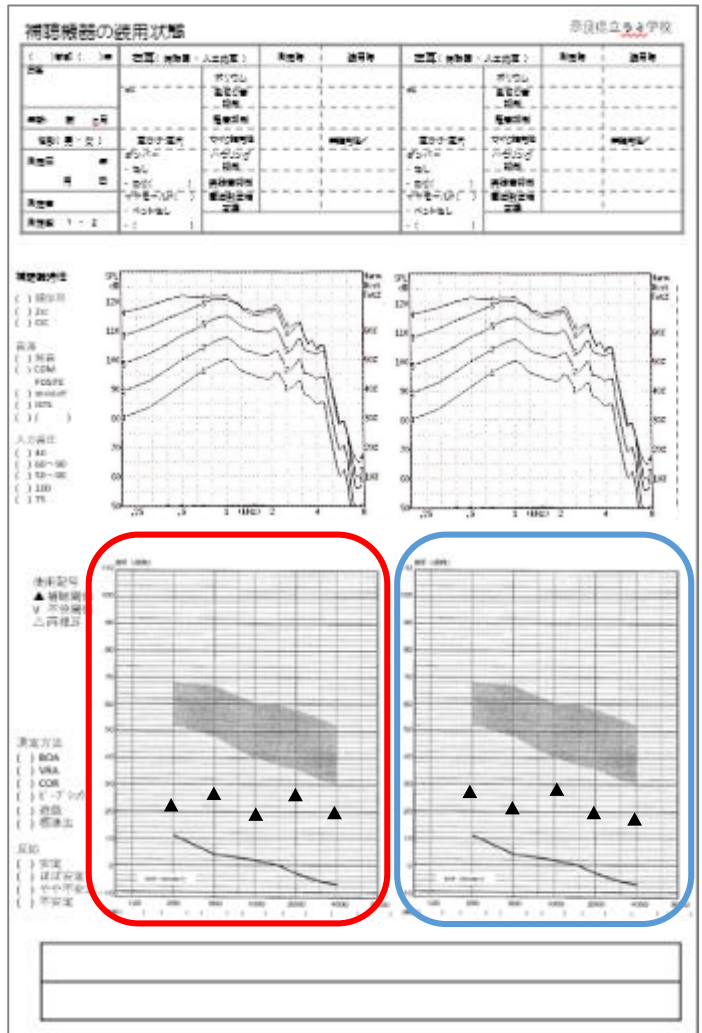
補聴器にどのようなデジタル機能（ハウリング抑制や騒音抑制など）が入っているのかを記しています。

## 補聴器特性検査

補聴器にどれくらいのパワーが入っているのか、故障がないかチェックしています。  
(詳しくは下の表)

## 補聴器装着閾値測定結果

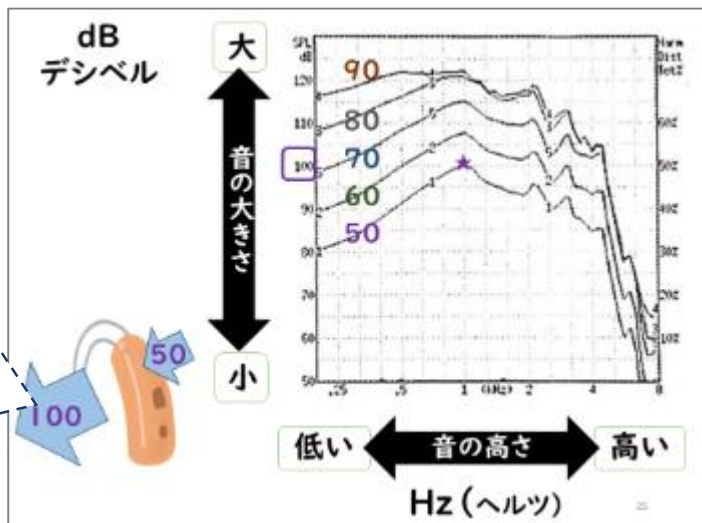
補聴器や人工内耳などの補聴機器を装着して聞こえた一番小さな音を▲で記載しています。  
左の表は右耳、右の表は左耳の結果になります。



## 補聴器の特性について

補聴器に50dBから10dBステップで90dBまでの音の大きさ、低い音から高い音までの音をきかせて、補聴器がどれほど音を大きくして耳に届けるのかを示しています。

例えば、★印の値は1000Hzの音の高さで、50dBの音が聞こえたときに、補聴器が50dBの音を大きくして、100dBの音の大きさを耳に届けていることを示しています。



# ～聴覚障害教育担当者研究会～

○聴覚障害幼児・児童・生徒を担当されている先生方との情報交換や、聴覚障害に関する基礎的な内容を学ぶ研究会を5月28日（金）に本校で行いました。講座の内容は2つあり、【きこえのしくみと疑似体験】と【難聴児の理解と支援】で、密を避けるためにグループに分かれて実施しました。今回はその様子を簡単に紹介します。

## 【きこえのしくみと疑似体験】

○研究会では、きこえのしくみや補聴機器の扱い方、視覚的な支援の必要性などの話がありました。また疑似体験では、雑音の中でヘッドホンをつけ、聞こえにくい状態でみんなで話をしました。話の内容を体験者に伝えるために、周りの先生方の様々な工夫が見られました。

### 【体験後の感想】

- ・集中力が必要で疲れた。
- ・表情が分からないので不安だった。
- ・自分の声の大きさが分からなかった。
- ・自分が伝えたことの反応が分かりにくかったので、伝わっているのかが分からなかった。
- ・自分の声が変わらないかと心配になった。
- ・分かっていなくても「分かっている」と答える子どもたちの気持ちが分かった。子どもたちが忖度している。思春期になると周りに合わせて「分かっている」と言いがちになることが分かった。



### 【疑似体験を通して、自分がほしいと感じた支援】

- ・話し始めの人は、手をあげてから話してほしい。
- ・ジェスチャーをつけてほしい。
- ・筆談で会話の内容を教えてほしい。
- ・自分の話したことがちゃんと伝わったかどうか不安になったので、あいづちを打ってほしい。



## 【難聴児の理解と支援】

○難聴児の心理面の話や子どもにとってきこえやすい環境作り、起こりやすい人間関係のトラブルなどに加え、普段の授業のことから入学試験での支援方法などの話でした。参加された先生方はご自身が担当している子どもをイメージしながら、「なるほど。」といった表情で聞いていました。また、日頃感じている子どもへの支援方法の悩みを先生方で話し合いました。他校の取り組みも聞けて良い情報交換の場になりました。

全体終了後は、希望者のみ学部や学年、教科ごとで支援方法に悩んでいる先生方が本校の教員と話をする時間を設けました。子どもの話を聞きながらどんな支援方法が良いか一緒に考えたり、本校での取り組みを紹介したりしました。今回の研修会を通して聞こえにくい子どもたちが自分に合った支援を受けられ、安心して学び、安心して過ごせるようになってほしいと思っています。

（文責 山中）

# ろう・難聴教育研究会



## 【研修概要】

6月5日に、ろう・難聴教育研究会が本校からオンライン配信で開催されました。講師として本校の元校長先生であり、現在は障害児通所事業所すてっぷの施設長の廣中嘉隆先生のお話を伺いました。

## 【研修内容】

「元管理職の立場から見たろう教育の現場と課題」というテーマのもと、廣中先生が提示された10の問いに対して、「正しい答えはないけれど、正しい問いはあると考えている。今日の話を参考に、またみなさんにもこの問いに対する答えを考えてほしい」とおっしゃっていました。

今回は、その内容をいくつか紹介したいと思います。

### 「ろう学校には特色が必要か」

ろう学校は、学校によって方針が異なるが、特にコミュニケーション手段の位置付けは、学校によって特色があり、そのような特色を競い合うのではなく、学び合う姿勢が大切になるということでした。ちなみに、本校では、幼稚部園歌から抜粋して「声がひびき手話がはずむろう学校」がキャッチフレーズになっています。

### 「ろう学校教員の専門性をどうやって受け継いでいくのか」

ろう学校教員の専門性とは、「言語（手話・日本語）について」「コミュニケーションについて」「聴覚活用について」「授業について」「子どもたちの多様性について」のことを指すということでした。

特に、その中でも聴能部は「聴覚活用についての専門性」の軸を担っています。子どもたちが聴覚活用することができるように、聴能部としては、補聴器機の扱いの専門性も大切にしています。支援できるということが求心力にもなっていくので、在籍、または地域の学校に通う幼児児童生徒から信頼してもらえるような専門性を育てていきたいと思っています。

### 「人工内耳についてどう考えるか」

人工内耳をつけているからといって音声だけで日常生活の音のすべてを聞き取れるようになるということではないため、手話も活用していくことが必要であり、そうすることで日本手話も日本語も活用できるようになり、この「音声も手話も使える」ということを利点に考え、生かしていくことが大切である。また、人工内耳の子どものアイデンティティの形成を大切にしていくことが必要になるということでした。

(文責 井上)

## キンキ補聴器センター 濱田さんの来校日について



キンキ補聴器センターの濱田さんの来校日が7月より変更になるので連絡させていただきます。

### 変更前

- ・毎週月曜日（月曜日が祝日の時は火曜日）
- ・第2木曜日

### 変更後

- ・毎週月曜日（月曜日が祝日の時は金曜日）